



2016(平成28)年1月25日発行

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)

住所/〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15

TEL/06-6879-5021

<http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp>

禁転載 (この紙面は再生紙を使っています)

血液浄化部リニューアル

明るいスペースで、安心・快適な治療



リニューアルした血液浄化部

血液浄化部は、腎臓内科に入院された末期腎不全の患者さんの透析導入や、地域の医療機関から手術や治療のため転入してこられる透析患者さん、急性腎不全の患者さんなどを対象とした透析療法を行っています。また、血液透析だけでなく、近年安全性の高まった「腹膜透析(CAPD)」にも積極的に取り組んでいます。血液透析は、週3回定期的に医療スタッフのもとで安心して治療をうけることができますが、血液中の老



寝たままテレビなどが観賞できます

廃物や過剰な水分を取り除く回数に限られるため、体内バランスが変動しやすくなり、一方腹膜透析は、患者さん自身の腹膜を透析装置として使うため、自宅や職場で自ら行うことができ、毎日数回の透析で体のバランスを保ちやすくなる反面、おなかの中に管(カテーテル)を通して透析液を入れるため、合併症を防ぐための自己管理が求められます。本院では、療法選択外来でメリット・デメリット

を詳しく説明し、患者さんのニーズや生活環境にあった透析の選択が可能です。また、当部は透析療法だけでなく、膠原病や多発性硬化症などの自己免疫疾患に対する「血漿交換療法」や、炎症性腸疾患などに対する「白血球除去療法」なども行っています。患者さんの自己抗体を血漿と共に取り除き、新しい血漿と置き換えたり、炎症に関与する白血球系の細胞を除去したりすることで、劇的な効果が確認されています。また、血液型不適合の腎移植においても、術前の「血漿交換療法」で抗体を取り除き、免疫反応を防ぐことで成功率が高くなります。他にも、薬でコントロールできない家族性高コレステロール血症では、LDLコレステロールを除去する血漿交換で、動脈硬化による足の血管の詰まりや心筋梗塞を予防するなど、難治性疾患の特殊治療や先端医療のサポートを行っています。

昨年12月8日からは、ベッド数が8床から14床に増床され、一日最大28名の患者さんに対応できる体制が整いました。また、透析機械14台のうち10台は一括で、残り4台は病態ごとに透析液を作成するなど、効率化と個別化を両立できます。さらに、循環器系の手術後で不整脈などを起こしやすい患者さんに対応するため、心電図などの機器のさらなる充実を図りました。また、本年1月に新システムとなった電子カルテを1床ずつに完備し、ミスを防ぐだけでなく、急変の多い透析患者さん



日々の診療は電子カルテが支えています

電子カルテは、患者さんの診療記録、医用画像を記録・保管し、必要時に閲覧可能とするシステムです。外来・病棟などから、臨床検査部等の中央診療施設に医師の依頼情報を伝達して会計を自動化したり、検査結果等の情報を機械に伝達し、作業を自動化したりしています。また、院内の物品や流れを管理する役割も担っています。

システム化への道のり

本院でコンピュータシステムが本格的に導入されたのは、平成22年の第四期システムで、完全ペーパーレスでの電子カルテシステムの運用を達成し、これをもって、本院の診療記録、医用画像、伝票の全てがコンピュータ管理となりました。

電子カルテのメリット

診療記録の電子化によって、カルテ搬送が不要となりました。それまでは、救急で患者

新電子カルテシステムが稼働

本年1月より、本院の電子カルテシステムが新しくなりました。

平成5年、病院が現在の地に移転した時からでした。それまでは、紙のカルテ、フィルム、複写式の伝票で運用していたため、人手や時間がかかり、正確さに欠けていました。そこでまず第一期システムとして、処方や検体検査、画像検査の伝票運用のシステム化を始め、平成12年の第二期システムで、ほぼ全ての伝票運用を電子システム化しました。

平成17年の第三期システムでは、画像をデジタル化して管理し、フィルムを使わない運用としたほか、統合的な物流システムを導入し、物品の流れを把握しやすくなりました。平成22年の第四期システムでは、完全ペーパーレスでの電子カルテシステムの運用を達成し、これをもって、本院の診療記録、医用画像、伝票の全てがコンピュータ管理となりました。

さんが来られると、カルテの取り寄せに20分ほどを要していましたが、電子カルテでは、すぐに診療記録を見ることが出来ます。また、外来と入院で分かれていた紙カルテを、電子化によって統合し、全ての記録をまとめて閲覧できるようになりました。さらに、多種多様な文書が自動的に整理され、過去の情報でもすぐに見つけ出すこともできます。病棟では、医師、看護師、薬剤師に加え、リハビリテーション、褥瘡対策、感染症対策、栄養サポート、心のケアなどの専門職が患者さんの診療に当たっています。これらの医療スタッフは、患者さんの日々の病状を把握し、観察したこと、実施した診療内容を、他のスタッフに伝える必要があります。しかし、紙のカルテはひとつしかないので、必要な時に閲覧・記録ができないことがあり、チーム医療の障壁となっていました。

2800以上の端末

電子カルテは、この問題を解

ISO認定授与式



昨年9月17日、本院は臨床検査の国際認定であるISO15189の認定承認を受けました。

今回の認定対象部署は、臨床検査部、輸血部、病理部、放射線部および超音波検査センターで、10月22日に行われた認定証の授与式においては、公益財団法人日本適合性認定協会の久保真氏(専務理事、事務局長)より改めて認定の意義とその維持における心構えが伝えられ、金倉病院長をはじめ同席した職員一同気持ちを新たにしました。

新診療科長等ごあいさつ



●難病医療推進センター長
おおぞの けいいち
大 藺 恵 一

昨年、指定難病が306疾患に拡大され、また、小児慢性特定疾病も704疾患に増加しました。しかし、難病に関して提供される情報は不十分です。そこで、難病に関する、より適切な情報の提供、難病に関する治験あるいは臨床研究の推進、治療法の開発を含む今後の難病対策の発展への貢献などを目的として、難病医療推進センターが設立されました。本センター設立により、難病医療に関して関係各科の連携および医学系研究科との協力体制がスムーズになり、良質な医療を提供することに通じることが期待されますので、皆様のご理解、ご協力をお願いします。(平成28年1月1日就任)



●リハビリテーション科長
よしかわ ひでき
吉 川 秀 樹

本年1月1日付にて、本院においてリハビリテーション科を新規に標榜することになりました。この診療科の設置は、2017年より始まる新専門医制度を踏まえて研修の基幹施設となるための条件として求められています。それにともない外来紹介患者を受け入れることで、超高齢社会の中で求められるリハビリテーションのニーズに対応しながら幅広い診療を提供いたします。また、リハビリテーション医研修に関しても一層の充実を図ります。(平成28年1月1日就任)

決し、今やチーム医療に欠かせないツールとなっています。新しく稼働する第五期システムは、2800台を超える端末、サーバで構成され、末端まで高速ネットワークで接続され、第四期システムで不十分だった機能を強化し、より優れたシステムへと進化しました。外来では、患者さんの呼び込みシステムがより柔軟な対応ができるようになりました。そのほか、「重症患者のルート等の情報を管理する機能」「医師の指示に連動してオーダーを発生させ医師の負担を減らす機能」「必要な記録の作成を誘導する機能」「患者さんの疾患ごとに標準的な記録作成を誘導し、自動要約したデータを表示する機能」「腎機能の低下などを知らせ適切な治療が選択されるようサポートする機能」等が加わります。また、紹介元や転院先、並行して診療を行う医療機関が、本院の診療記録の必要な部分を、ネットワークを介して閲覧可能とする機能を稼働させました。これらの機能により、さらに強固な医療連携体制を構築し、より迅速かつ適切な患者さんの診療を実現できると考えています。

PHOTO



ホスピタル ミニ・ニュース TOPICS



DMAT訓練

10月16日、列車と自動車の衝撃事故を想定した救出救護訓練に災害派遣医療チーム(DMAT)として参加しました。事故によって発生した約100名の模擬負傷者をJR西日本、消防本部、警察本部、DMATが連携し救出しました。DMATは、救出された負傷者のトリアージを行い処置や治療を実施しました。実際の列車や自動車を使用した緊迫感のある訓練でした。



消防訓練(11/26)



クリスマスコンサート(12/24)



クリスマスイベント



市民公開フォーラム(12/5)



国際医療シンポジウム in オランダ



10月9日、10日、グローニンゲン大学と大阪大学の共同国際医療シンポジウムGo Global!! 6が開催されました。

中田研国際医療センター長をはじめとする各大学からの代表者が2日にわたって発表を行い、3回目を数える海外での国際医療シンポジウム開催で、さらなる本院のグローバル化についての意見交換も行いました。



敷地内はすべて禁煙です!

ご協力よろしくをお願いします



より良い紙面づくりのために、阪大病院ニュースへの皆様のご意見、ご感想をお待ちしております。
ibyyou-soumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp



小児外科のメンバー

小児外科

子どもへのQOLに配慮し、低侵襲手術に積極的に取り組む

当科は外科のなかでも専門性の高い小児外科疾患を担当しています。大学病院の特徴としては、多くの診療科や部門の協力のもと、小児臓器移植や小児がんに対する先進的・集学的な診療に取り組んでいます。近年、小児外科のすべての疾患において、治療成績が格段に向上しており、単に「病気を治す」だけでなく、子どもの生活や精神面、将来にも配慮した治療をめざしています。

一方、小児外科の重要なテーマである新生児外科・周産期医療の充実にも力を入れています。昨年10月には、当科と産科婦人科、小児科の新生児部門などが連携し、「胎児診断治療センター」を開設しました。超音波検査やMRIなどによる胎児診断を行い、お母さんと生まれてくる赤ちゃんにとって適切な分娩時期や方法を検討し、出生後の円滑な治療に取り組みんでいます。また、出生前に治療が必要と考えられる疾患については、胎児治療を提供できる体制を整えています。



CT撮影室。左上のモニターに患者氏名が表示され、取り違えを防ぐ

放射線部

徹底した「患者確認」と「照射線量解析」で安全性を確保

放射線部は、X線やCTなどの放射線を使用した画像撮影「撮影部門」や「放射線治療部門」に分かれ、「撮影部門」は、X線による単純撮影や透視といった一般的な画像撮影、CTなどによる画像検査、放射線診断技術を用いたIVR(インターベントシオナルラジオロジー)による血管内治療など、患者さんの負担が少ない低侵襲治療を行っています。そして「核医学部門」には、がんの早期発見・遠隔転移の発見に威力を発揮するPET(陽電子放射断層撮影法)や「放射線治療部門」には、放射線が患部以外に当たらず最適な照射量で照射できるリニアックと呼ばれる装置を設置しています。また放射線を正確に照射しミスで切り取ったように患部を破壊する最先端治療機器「サイバーナイフ」による治療も実施しています。

検査や診療において当部が最も力を入れているのが「患者確認」です。検査依頼カードのバーコードにより検査内容や撮影部位を確認できる独自のシステムを開発・導入しています。移動型X線装置を病棟に持ち込んだ場合にも、患者さんのリストバンドやベッド柵のバーコードで確認できます。さらに、造影検査の場合は、患者さんのアレルギーや腎機能の情報などもモニターに表示されるなど徹底した安全管理を実施しています。

り入院)を実施しているほか、子どもさんの通園・通学の妨げとならないよう「日曜入院」も行っています。

手術を受ける子どもたちの負担を減らし、成長を妨げることのない治療が当科の目標です。そしてなにより保護者

の方々に信頼していただけるよう、安全に配慮した診療を行っています。

病院長おすすめ御膳



昨年10月に病院長おすすめ秋なごみ御膳をご提供しました。舞茸や紅葉生麩の天ぷら、しめじと栗の炊き込みご飯など、秋の食材を使ったメニューです。万博公園で満開だったコスモスをあしらった和紙や、紅葉柄のカードで秋らしく飾り付けました。患者さんからは「和紙が敷いてあって旅館に来た気分になりました」「おかわりしたかったです」など、好評をいただきました。

天ぷら衣づくり3つのポイント

特に好評だった天ぷらについて、本院で行っている衣づくりのポイントをご紹介します。

- ★薄力粉100gに対して、片栗粉(またはコーンスターチ)20g、ベーキングパウダー少量を目安に加えると、カラッと食感がふんわり揚がります。
 - ★よく冷やした薄力粉と水を1対1の割合で合わせ、箸で切るように軽くかき混ぜます。
 - ★油の温度が下がらないよう、具材は鍋底が3分の1ほど隠れる程度にとどめます。
- 少しの工夫でご自宅でもサクッと美味しい天ぷらが作れます。ぜひおためしを!

サクッとおいしい!



現在、X線を使用するCT装置などで照射した照射線量の管理が世界的に普及しており、当部も全国に先駆けてデータを収集し、照射線量レベルの把握・解析に努めています。今後はX線検査や血管撮影なども対象として患者さんの安全性を確保し、検査における照射線量の標準化に貢献していきたいと考えています。また、当部は患者さんに対する説明も重視しています。

撮影なども対象として患者さんの安全性を確保し、検査における照射線量の標準化に貢献していきたいと考えています。また、当部は患者さんに対する説明も重視しています。